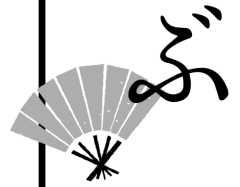


古典落語に



学



落語家

立川談四楼

第四十四回 松竹梅

松

五郎、竹蔵、梅吉という三人組、頭の文字が松竹梅とめでたいので、出入り先のお店のお嬢様の婚礼に招かれた。ところがこの三人、結婚式に出席したことがなく、どう振る舞っていいのか分からない。仕方なく岩田の隠居に相談に行く。

隠居は「ただ飲み食いするだけでは失礼だよ」と言い、松竹梅とめでたいんだから、何か余興をやったらどうかと勧める。

「挨拶をしたら三人並んでパッと扇子を広げて、まず松さんが謡曲の節回しで『なったあ、なったあ、蛇じゃになった。当家の婿殿蛇になった』と言うんだ。次に竹さんが『なに蛇じゃになられた』

と続く。最後は梅さんで『長者になられた』と締めくくるんだ。お婿さんおむこさんが蛇じゃになったで場の雰囲気おんぎがちよっとおかしくなっている。そこへ『長者になられた』だからこれはウケるよ』

い
手てくいかない。松さん、竹さんは何とかそれらしくで

きるが、梅さんが「長者になられた」という簡単な文句ぶんこうが言えない。覚えてもすぐ忘れてしまうのだ。時間がきて、まあ何とかなるだろうと三人は披露宴会場ひやうげんかいじょうに乗り込んだ。

型通りの祝辞いわげがあり、宴うたげはいよいよ余興の時間じかんに。「松五郎、竹蔵、梅吉というお三人、松竹梅という大変たいへんめでたいお三方が

本日は余興を披露してくださるそうです。さあどうぞ！」

拍

手の中を登場すると、出席者全員目が注がれて、これだけで三人は度を失う。初めて目にする披露宴会場の雰囲気にもまれてしまったのだ。何をするために出てきたかも一瞬忘れ、慌てて余興だったと気を取り直す。

「まことにご愁傷様で……じゃなくて、本日はご婚礼、まことにおめでとうございます。我ら松竹梅がこれより余興を披露いたします」

松さんのご愁傷様は冗談と受け止められたようで、笑いが起きた。口上が済むと、今度は期待の拍手が巻き起こる。またも度を失う三人、目と目で合図を送り、いっせいに扇子をパッと広げる。三人の動きが揃ったものだから、また拍手だ。まずは松さんのきっかけだ。

「なったあ、なったあ、蛇になった、当家の婿殿蛇になった」

続いては竹さんで

「なに蛇になられた」

うん、ここまでは順調だ。さあ梅さん、決めてくれ。ところが梅さん、忘れた上にすっかり逆上している。「長者になられた」がまったく出てこない。

「……大蛇に……風邪に……番茶に……」

松さんが元に戻ってやり直す、やはり梅さんでつかえる。

何度か繰り返すうち、松さん「なったあ、なったあ、ヤ(嫌)になった」と言い出す始末。あ、ついに梅さんが思い出したようだ。笑顔が浮かんでいる。それ梅さん、今度こそ。

「亡者になられた」

もう宴は滅茶苦茶、松さんと竹さんは何とか逃げたが、当の梅さんが逃げ遅れてしまう。松さんと竹さんがこのことを岩田の隠居に告げると、隠居はこう言います。

「大丈夫だよ。梅さんだけにお開きとなったら帰ってくるよ」

◆
れが『松竹梅』ですが、オチが分かりましたか。ちょっと

と分かりにくいですよ。結婚披露宴には忌み言葉というものがあり、そこからきています。「これで披露宴は終わりです」と言ってはならず、「当披露宴、丸くお開きといたします」と言わなければなりません。つまりこの「はなし」のオチは、終宴を意味する「お開き」と、梅の花が「開く」にかかっているのです。咲くということですね。

終宴は「お開き」で、他にも返す、戻す、割れる、切れるなども婚礼での忌み言葉で使いません。今は昔ほどうるさくありませんので、知っておいた方がいいという程度だと思います。